

《研究ノート》

## 記号としての「満州」

植田 康夫

### 1. 想い出の中の「満州」

TBSブリタニカから刊行された『ブリタニカ国際大百科事典』で「満州」という項目を引くと、次のような書き出しとなっている。

#### 満州

Man-chou東北アジア地域の歴史的な地域名および民族名。満州の語は、いまの中国東北地方東部に居住していた女真人じょしんじん〈→女真〉の国を女真語で呼ぶ名（マンジュ国Manjyu Gurun）として十七世紀の前半に現れ、次いで女真人をさす新しい民族名となり、さらに彼らの居住する地域を呼ぶ一般名として使われるようになった。地理的にはほぼ東部内モンゴル以東、鴨緑江、豆満江（土們江）以北、黒竜江（アムール川）流域以南の地域で、東方は日本海に面している。（中略）十九世紀に入り、中国が列強の侵略にさらされるようになると、この地域でも、まず黒竜江北方地域が、次いで沿海州がロシアの領有下に入り、以後ロシア、日本、中国の諸勢力が相争い、ついには日本の傀儡政権満州国の樹立となった。今日中国においては、満州という呼称は、女真族の後裔の称（一般には満族）として現れる以には使われることはない（後略）(1)。

百科事典で、このように説明されている満州は、1932年（昭和7）に「満州国」の名のもとに建国し、新国家の執事には溥儀ふぎが皇帝として就任した。しかし、満州国の政府は、日本人の統制下におかれ、政府の最重要機関で日本の総理府にあたる国務院の実権を握る総務長官には日本人だけが就任し、軍事も関東軍の統制下にあった。そのため、満州国には、日本人が内地から旅行に出かけたり、満州国に移住し、現地で生活したりする例も多く見られた。また、第2次大戦中は、政府の国策として、満蒙開拓団が日本から送られた。

満州で戦前から戦中を過ごし、戦後内地へ帰り、大成した人もいるが、たとえば、俳優の森繁久弥氏もそのひとりである。森繁氏は、1939年1月にNHKのアナウンサー試験に合格し、満州電信電話株式会社内にあった放送局にアナウンサーとして終戦まで勤務したが、満州での思い出を『森繁自伝』や『こじき袋』などの著書に書いている。次は、『森繁自伝』の一節である。

新京駅に降りた私は、まず鼻をついてくる馬糞の香りにいささかゲツと became、駅から真直ぐにのびる中央大街を行くにしたがい、街路樹を吹きぬける大陸特有の乾燥した空気が実に肌に快く、飛び舞う柳架と馬車の鈴の音に、妙にロマンを感じて、あっさりここを安住の地と決めた。そして、放送局の門に入って、のどかな実習生の三ヶ月を送ったのだが―。(中略)

録音器をかついで私は満州全土をくまなく歩いた。北は黒河から漠河に至る人跡未踏の地から、興安嶺山下に道を探して、オロキョン族やゴルチ族を訪ねたり、春の解氷に先だて、零下四十度以上の草原にトラックを飛ばし、アルゲンの国境から、カザックのユートピアであるドラガチェンカ（三河地方）にまで取材の足をのばした。蒙古は、ハルハヤブリヤート、とアタイメンをさまよひ、また万里の長城近く熱河のあたりを、今の中共（当時八露軍）の掃討戦について歩いたり、天津から北京。東滿は綏芬河からボグラニーチャヤ、謎の興凱湖。また海拉爾から満州里の国境。そして、冬のダライ湖の氷上漁業を凍傷にまでなつて収録した。

これら何千枚の貴重な記録は、その頃、文部省や好事家のよき資料となったのである。

そして、その間に子供を作ることも忘れず、さらに男子二児をもうけて、初めて自力で生活できる、つましくも平和な家庭をつくつたのである。(2)

さらに森繁氏は、満州での生活を次のように回想している。

年々送られてくるアナウンサーは、“新京のママさん”と家内を呼び、寂しければ、ここで甘えてホームシックをいやした。しかし、その返礼として子供のお守りを皆させられたのである。

天然痘にかかって家のまわりに縄を張られたこともあれば、アミーバセ

キリにもかかったが、よくも死なずにあれだけの仕事をしたものと、今も満州の地図を見れば、熱い感懐がこみあげてくる。

見はるかす曠野に沈む紅い紅い夕陽を見て、たった一人、蒙古やバルガの大草原に立った私は、そのあたりから、気も心も大まかになったようだ。

そんな夕陽や、また雄大な興安嶺や、アムールの黒緑の流山や、白頭山や、豊満ダムや、チチハルの野鴨（素人淫売）や、大豪浴池や、うまい満人の三助や、ロシア料理や、ハルピンのナターシャ嬢や、大連の星ヶ浦や——が走馬燈のように廻る中を、私は娘の手を引いて歩いている夢を見た。

(3)

## 2. 満州鉄道の架想旅行記

戦前、戦中にかけての満州で暮らした人々の胸中には、『森繁自伝』に書かれているような思い出が秘められているのであろうが、その満州を1937年（昭和12）8月9日から8月28日まで満州鉄道に乗って旅行したという架想旅行記がある。文芸評論家の川村湊氏が書いた『満州鉄道まぼろし旅行』という本であるが、これは1998年に文春ネスコから刊行され、2002年に文春文庫からも刊行されている。単行本の「あとがきにかえて」によれば、「昭和十二年八月に実際に満州旅行をした日本人旅行者の保存していた資料をもとに案内人としての私、川村湊とネスコ編集部の鳥鬼沼佳代さんとが『机上』で再構成した『まぼろし旅行』」の記録という装いになっている。

「まぼろし旅行」記であるが、この本には、日記体の本文の他に、1937年当時の満州の写真や絵、時刻表なども収められ、当時を完全に再現しており、タイムカプセルで時代をさかのぼったような気分させられる。川村氏が小学6年生のサツキくと小学4年生のヤヨイちゃんをつれて、満州鉄道特別急行「あじあ」号に乗って、大連から哈爾濱・ノモンハンまでを20日間で踏破するという形式になっているが、「満州じゅうの行きたい所へすべて行き、／食べたい物を全部食べ、／泊まりたい宿に惜しまず泊まる、／自由で可笑しな旅」(4)の記録である。架想旅行記とは言っても、1937年当時の事実に基づいて書かれているので、リアリティがあり、当時の満州はこんな様子であったのであろうという気持ちにさせる。そのため、文庫版の「あとがき」によると、この本はよく売れ、「瞬間最大風速だが、都内のある書店では週間ベストセラーの十位以内に入ったこともあった」という。ちなみに文庫版は2004

植田 康夫

年2月の段階で、まだ第1刷を売っている状況なのに、単行本の方は文庫化以後も売れ続けており、4刷を重ねている。これは、本書に写真や図版が沢山入っているため、文庫版よりも判型の大きい単行本の方が求められるのかもしれないが、この「まぼろし旅行」記がどのように1937年、すなわち建国4年目の満州国の様子を再現しているかを、冒頭の記述によって紹介してみよう。

昭和12年8月9日

大連上陸・大連港

午前9時、船が二階建ての大きな埠頭に横付けされました。満州の玄関、大連に上陸。まぼろし旅行のはじまりです。

「うわあ、なんて大きい港なんだ」

サツキくん、ヤヨイちゃん、おおいに驚いてくれたまえ。

ここが東洋一の埠頭、大連の港だ。大きくてびっくりするだろう。殺風景な満州というイメージがいちどに吹きとんでしまっただろう。新しい夢や望みをいだいて、日本から満州に渡ってきた人たちはみんなまず大連の港がりっぱなことにびっくりしてしまうんだ。

五本の指のように突き出ている突堤と岸壁を合わせると、全長約二里(八キロメートル)。四千トンの船が一度に四十隻も横付けできる。軍艦でいえば戦艦、ながとむつ長門や陸奥ほどの、三万トンもある大きな汽船が、らくらく横付けできるんだ。

おまけに、各埠頭には、すべて満州鉄道のレールが引き込まれていて、船からじかに汽車へ貨物を移せるというのだから、なんと豪勢なことか。

大陸の玄関・大連港に出入りする汽船は、年間万余隻。貨物が一千万トン、乗降客七十三万人、手荷物百三十万個を軽々とさばく、まさに東洋一の自由貿易港なんだ。

待合所には、一度に五千人が楽々入れるんだよ。

さあ、大連市一の高層建築、大連埠頭事務所の屋上へ上ってみよう。(5)

こうしてサツキくんとヤヨイちゃんをつれての「満州鉄道まぼろし旅行」が始まるのだが、ここに書かれていることは、すべて当時の資料に基いており、1937年当時の満州国の様子を再現している。上記の文章に続けて、こん

な記述もある。

第二埠頭で出航の用意をしているのは、日満航路の鴨緑丸だ。

「おじさん、港の船が船尾につけている五色の旗が満州国の旗ですね」

ああ、そうだよサツキくん。満州に暮らす、五つの民族をあらわす色だ。赤・青・黒・白・黄色の五色だね。

「ずいぶんたくさんお船がいるのね。船と棧橋との間にわたされたお別れのテープがきらきら輝いてるわ」

鴨緑丸は、午前11時にここをたって三日目の朝には門司へ着くから、満州と日本とは、たった四十時間しか離れていないことになる、ずいぶん近いものだね。「左のほうの埠頭には、何があるんですか？」

あの第四埠頭の向こうにはロシア人町の波歩場がある。ジャンクという中国式の帆掛け舟が出入する所で、ジャンク波止場などといわれている。

(6)

これは、1937年当時の大連港の様子を描いた部分だが、この時点から6年経った1943年の大連について、戦後書かれた文章もある。1941年に父が満州国立大学哈爾濱学院に勤務することになり、小学4年生の時、満州に渡った女性が書いたものだが、父が大連高等商業学校長に赴任したため、この女性は大連に移ったのである。

満州の玄関口大連市は、当時関東州（現、遼東半島）の一都市で満州国ではなかった。関東州は日本が日清戦争でロシアから租借権を得たが三国干渉でロシアに返還。日露戦争でロシアから日本へ再返還され、日本の租借地となっていた。行政も日本政府拓務省（後に大東亜省）管轄下にあり、地図も日本と同じ赤い色になっていた。父の転任辞令も哈爾濱学院は満州国國務院から、大連高商は日本内閣から発令されている。

大連の気候は日本東北地方並みで、三方を海に面し自然の恵み豊かな美しい街だった。かつてロシアがパリをモデルに設計し、市内がほぼ完成した時点で日露戦争に破れた。ロシア軍は退却時に市中を爆破したが爆薬が不足、埠頭や街の一部破壊にとどまった。引き継いだ日本はロシアの設計図を修正なしに採用、陸・海軍の予算から上下水道ガス完備の日本にもな

い環境都市を造りあげた。道路や構造物には満鉄が潤沢な予算を投じた。東洋一の病院といわれた大連病院やヤマトホテルなど、現在も大連の貴重な文化遺産として使われている建物も多い。港は水深が深く国際自由港として世界の物資が集った。

昭和十八年当時の市の人口は約八〇万、日本人約二〇万、中国人約五八万、朝鮮人とその他の民族で八千、治安もよく日本人天国だった。「アカシアの大連」と内地の人々の憧れの土地だった。(7)

戦後においても、このように回想される満州だが、その満州を1936年の時点でガイドした文章もある。1936年に三省堂から刊行された『朝鮮満州旅行案内』である。この本は、1936年4月10日に初版が刊行され、1938年3月25日に35版が刊行されており、定価は40銭だが、2004年2月に開催された古書展では、4800円の売価がついていた。次章で、このガイドブックに記載されている大連の紹介文を引用してみよう。

### 3. 『朝鮮満州旅行案内』と満州

『朝鮮満州旅行案内』（文末の図Ⅰ、Ⅱ参照）は折本仕立て、地図や写真が豊富に収められているが、「大連」の項は、次のように記述されている。

#### 大連

大連市は極東に於ける自由港として、又連京線（満鉄本線）の起点として、欧亚連絡の要衝に当り、同時にまた新興満州国の表玄関をなしてゐる。

〔人口約三〇萬〕

（中略）

〔大連港〕汽船が大連埠頭に着くと、まづ第一に旅客の眼を驚かすものは、埠頭設備の規模の宏大なことで、東洋第一、恐らくは世界第一といっても過言ではない。全長五〇〇〇米、水深八米乃至一三米、同時に三千噸乃至二萬噸級の船舶四〇隻の繫船能力をもつ第一より第三に至る大岸壁、工費七十萬圓、収容能力五千人の船客待合所、埠頭構内全面積約六二一萬平方メートルのうち、三九七、五〇〇平方メートルを占める大豆の野積場、其の他豆油・重油及石油其の他危険品揚積用としての二本の寺兒溝棧橋、鉍石其の他撤貨物荷役のための濱町埠頭、戒克による貨物揚積のための入船埠頭、更にこ

れら埠頭に於ける諸般の事務を統轄する埠頭事務所の巨大なる七層樓の建物等を見れば、いかに大連港の経済的価値が重大であるかを知ることが出来よう。實に大連港は、物資無尽蔵といはれる大満州帝国の一大関門であり、従って大連港の消長は即ち満州国の消長を如実に示すもので、また満州に於ける幾十萬の邦人が活躍の實際を反映してゐるところのものであると云はなければならぬ。今大連港の貿易船を見るに、開港当初の明治四十一年の輸出入総額は七〇萬七千圓であつたのに対し、昭和七年は約其の十一倍を示し、毎年平均三二萬圓の増加を示してゐる。輸出品の主なるものは、満州の特産たる大豆・豆粕・豆油・高架・石炭・鉄及鉄製品・柞蠶絲等で、輸入品の主なるものは麦粉、綿織物麻袋・鉄及銅・機械等である。

(8)

『朝鮮満州旅行案内』は、大連港についてこのように紹介し、さらに大連の〔市街〕〔大廣場〕〔大連西部〕〔星ヶ浦〕についても紹介している。そして「市内外の会社及諸施設」なども紹介し、「遊覧順路」「土産物」などの記事もあるが、このうち、〔市街〕についての記事は次のように書かれている。

〔市街〕大連市街は、ロシアが嘗て範を佛京巴里にとつてプランを樹てたものを我国が大体踏襲したもので、大・小七箇の廣場を中心に、舗装された多数の道路は蜘蛛網状に八方に放射し、街路にはすべて煉瓦造りの宏壯な建築が建ち並び、極めて清潔で、初夏の候ともなればアカシヤの並木は白い花房を垂れ、すがすがしい芳香を漂はせて心持よく、誠に「東洋のパリー」と称せられるのも決して過言ではなく、新興気分の旺盛した近代的の都市美を遺憾なく發揮してゐる。(9)

また、〔大廣場〕については、次のように紹介されている。

〔大廣場〕中央には満州に於ける距離の基点を示す「里程標」が建てられ、それを取り巻いて緑の芝生があり、花壇が設けられ、常緑樹が植えられ、大廣場自身が美しい公園をなしてゐる。大廣場の周囲には民政署・市役所・警察署・通信局・英国領事館・「ヤマト・ホテル」、正金・朝鮮及中国銀行等の壯大な建築が聳え立ち、少し離れて赤旗翻る蘇国領事館がある。ま

植田 康夫

た「ヤマト・ホテル」の背後には巨城のやうな大連医院が聳えてゐる。かやうに大廣場は、地形的に市の中心をなすばかりでなく、政治的にも経済的にも市の中心となつてゐる。(後略) (10)

この文章は、満州国が存在していた1936年に書かれたもので、当時、満州国をどのような言葉で宣伝していたかがわかる。そして、その頃、書かれた文章には、大連の文化状況を伝えたものもある。大連市霞町17番地にあった沙河口図書館の館長に1935年4月に就任した勝家清勝氏が1936年に創刊した『沙河口図書館報』（後に『図書館新報』となり、1938年1月には満州読書同好会の機関誌『満州読書新報』となる）で、『図書館新報』の誌名で1937年4月15日に発行された第1号の「今年度のプラン」は次のように書かれている。

伏見臺以西を一画とする西部大連は近時異常なる人口の増加を来し、邦人五萬五千を算せらる。加ふるに目下益々激増の趨勢にあり。然るに文化の施設之に伴はず僅か二個の小図書館二萬二千冊の蔵書を有するに過ぎず、東大連邦人八萬六千人に対し大小図書館六個二十三萬四千冊の蔵書を有するに比すれば読書文化の普及上比方面の住民は甚しく恵まれざる境遇に置かれたるものと云はざるべからず

即ち之の發展情勢に伴ふ図書館利用率の増加に順応し何程か都心に比し斯る不均衝なる状態を緩和せしめたき方針の下に十二年度予算案計上に当り最低限度の増額を要請するところありたり。(11)

この文章は、同じ大連でも、東部と西部では文化的格差があったことを示しているが、満州にはこのような現実もあった。そしてさらに、満州には同国に住む邦人の子供たちが歌っていた満州唱歌があったことを、昨年、産経新聞が紹介した。その歌を次章で引用してみよう。

#### 4. 「満州唱歌」に歌われた満州

産経新聞2003年4月28日付には「わたしと満州唱歌」という連載の第1回が掲載されているが、その記事は、こう書き出されている。

《満州では夏が終わると、学校の庭に土を寄せて水をためておきます。すると、翌日にはスケート場ができるのです。子供たちは「わたしたち」を歌いながらスケートを滑りました…》

東京都国立市の葛畑美千代さん（九八）の記憶にあるのは、小学校の校庭で子供たちが元気よく歌っていた姿。子供が小学生だったころに住んでいた満州の佳木斯での懐かしい思い出である。

厳しい満州の気候に負けることなく、元気いっぱい遊ぶ子供たちを歌った「わたしたち」は、代表的な満州唱歌のひとつ。満州で育った人には、テーマソングのような歌だ。

作曲は数多くの満州唱歌を作った大連音楽学校長の園山民平氏、作詞者は分かっていない。

この記事によれば、園山氏は1857年（明治20）、鳥根県に生れ、東京音楽学校（現・東京芸大）でピアノと作曲を学び、1922年（大正11）に満州に渡り、南満州教育会教科書編集部員となり、満州唱歌の創作にあたったが、「わたしたち」の他、「メガゲタ」「ウサギウマ」「娘々祭」「こな雪」など、数多くの作品がある。そのうち「わたしたち」は、次のような詞である。

わたしたち

- 一、寒い北風 吹いたとて おちけけるやうな子どもぢゃないよ。まんしうそだちのわたしたち。
- 二、それに雪さへ降ったとて たまげるやうな子どもぢゃないよ。まんしうそだちのわたしたち。
- 三、風の吹く日は外に出て リンクをまはろよ、スケートあそび。まんしうそだちのわたしたち。
- 四、雪の降る日も外に出て みんなでませう、雪投げませう。まんしうそだちのわたしたち。

「満州唱歌」は、「戦争や軍国主義を賛美したり、当時の中国を誹謗したような曲は一曲もなく、そんな歌詞も存在しない。すべて、満州の風土、風習や行事を歌った平和そのものの歌でした」と、この連載の第4回目（2003年5月1日付）で、東京都中野区の太田豊さん（七五）は証言している。しかし、

植田 康夫

日本人と満州との関わりはこのような証言だけに尽きるわけではない。そのことにも眼を向けるべきであるし、さらに満州という問題は複雑な課題を日本人に迫る。そのことを見ておく必要がある。

## 5. 「満州」が迫る複雑で重い課題

満州においては、ただなつかしく思い出される光景だけでなく、さきに大連の思い出の文章を引用した女性は、次のような光景も目撃したという。

満州での生活になじむと、こども心にもこの地の住民である中国人が不当に差別され、貧しい暮しに甘んじているのを感じた。満州紹介の絵本には、日本のこどもが肩を組み笑顔で満州国旗を振ったりスケートに興じる姿が描かれていたが、そんな光景には一度も出会わなかった。居住地も学校も別。日本人社会に特に貢献している中国人の子弟のみ日本人学校に入学が許可された。海水浴も日本人と白人のみ。中国人が海水浴を禁じられていたと知ったのは迂闊にも戦後だった。(12)

また「在満少国民」として満州で子供時代を過ごした男性は、こんな証言をしている。

一・二年の時、学校が楽しくて「どうして中国人や朝鮮人の子どもたちは学校へ行かないのだろう」と思った。学校がミニ軍隊になった三年からは、「中国人や朝鮮人の子どもたちは学校へ行かなくていいなあ」と思った。行かなかったのではなく行けなかったのだ。中国人や朝鮮人の子どもたちを学校に行けないようにしていたのは、日本人だったことがわかったのは侵略史実調査訪中を重ねるなかでだった。中国の古い街だった長春にあった中国の子どもたちの学校はつぶされ、「満州国」の首都として新しい都市計画のもとに作られた学校は全て日本人専用の学校だった。首都「新京」の学校には私が入学した桜木小学校をはじめ、白菊、八島、敷島など皇国史観にもとづいた名前が付けられていた。中国人の学校は都市部にはなく、校外のとても通えないような場所にしかなかったそうだ。(13)

こうした形で、満州に住んでいた日本人は、敗戦と共に厳しい報復に会う

のだが、その果てに、今では「満州」という国はなくなった。日本人にとって、「満州」は、各種のテキストの中に、記号として存在するだけである。

では、日本人が敗戦と共に受けた報復とは、どのようなものであったのか。それは、角田房子氏が『墓標なき八万の死者——満蒙開拓団の壊滅』という実録において報告した事実である。この実録で、角田氏は五族協和を理想として、満州におもむいた「満蒙開拓団」が1945年8月9日のソ連参戦以後、どのように苛酷な運命に見まわられていったかを報告しているのだが、角田氏は〈あとがき〉で、こう書いている。

「戦後は終わった」ということばが通年化して久しい今ごろ、私が満蒙開拓団の記録を書こうとするのは「戦後は終わっていない」という私の考え方を、一つの方法で実証してみたいと思ったからである。

満蒙開拓団の人々は、“国策”と呼ばれた至上命令を信じて満州に渡った。昭和二十年八月九日、ソ連参戦と同時に彼らは日本軍に放棄され、一切の保護を失って、血と泥と雨の中の逃避行を続け、虐殺、暴行の地獄を彷徨し、収容所では飢餓と寒気と悪疫にさいなまれた。女たちはその上に、異国の男の獣欲にまでさらされねばならなかった。こうして多くの開拓民——日本人の大集団が非業の死をとげ、全員が財産を失った。

この人たちの悲劇は、これで終わってはいない。戦後二十何年かたった今日なお、癒すことのできない痛手に苦悩の日を送っている人が多いのである。敗戦直後の満州で極限状態におかれた人たちの姿に、私は改めて人間というものを考えさせられたと同時に、今日なおうずく傷を負い続ける人々の姿は、私に国家と国民との関係を考えなおさせる。関係のない、どこか遠い国の話ではない。これは私たちの同胞の姿であり、私たちの国家のことである。(14)

角田氏は、このようなモチーフで満蒙開拓団の人々が出会った厳しい体験をレポートしたが、14歳から18歳の青少年を満州に送るという目的で1938年に設立された「満蒙開拓青少年義勇軍」の一員の花嫁となって満州に渡った女性の手記もある。井筒紀久枝さんの書いた『大陸の花嫁』である。

井筒さんは、父親を知らず、母の手一つで育てられ、母が井筒さんを連れ子して結婚し虐待されたため、「大陸の花嫁」になることを決意したのだが、

植田 康夫

敗戦をさかいに、日本へ帰ってくるまで、地獄のような体験を強いられる。その体験記を、井筒さんは2001年8月の終戦記念日に自費出版した。そして、2004年1月に改めて岩波現代文庫の1冊として刊行したが、この本には『句集満州追憶』も付されている。その俳句の中から、何句かを引用してみよう。

麦熟れて東西南北地平線

雪の曠野よ生まるる子の父みな兵隊

帽子縫ふて満州吹雪のあねいもと

大陸の満月日本語で唄ふ

北満に八月の霜麦いたまし

浮虜われら飢えつつ稲の穂は刈れぬ

穴掘ってわが子埋めし枯野かな

子を売って小さき袋に黍満たし

地平線行っても行っても枯野原

子を焼いてしまへばほっと冬の星

みなし子に夕焼満州国は亡し

霜柱異国祖国の間遠し<sup>あいだ</sup>(15)

句集の中から、アトランダムに引用したが、井筒さんは、体験記の中で「私は満州からやっとの思いで子どもを連れて引き揚げてきた。その子が亡くなった後、シベリア抑留から帰ってきた夫を、あたたかく迎えることができ

ず、離婚した」(16)と告白している。その井筒さんは、「以後、私の空しい思いをぶつけるところは俳句になった」(17)という。「大陸の花嫁」を志願した井筒さんにとって、満州での体験は永久に忘れ去ることは出来ないのである。

その満州について、「満州国は『第二のアメリカ合衆国』をアジアに打ち立てることができるかどうかという大きな実験でもあった」(18)と論じる人もいる。台湾生れの黄文雄（こう・ぶんゆう）氏であるが、黄氏は満州について、こう指摘している。

中華民国にしてもアメリカ合衆国をモデルに樹立された共和制国家だった。しかしそれは見事に失敗し、複数の政府が乱立する戦乱国家に陥っている。(中略)

その点、満州国は違っていた。満州は四四年来、中華世界の外にあったことから、そこには多民族国家の歴史的経験があった。満州国家がアメリカ合衆国と酷似している点は、豊富な資源と未開発の地域がたくさん残されていたことと、諸民族統合の新興移民植民地だったことだ。(19)

満州をユーラシア大陸におけるアメリカにたとえた意見は黄氏の他にも表明されているが、満州＝アメリカ論によって、日本人が満州においてとった差別的行動は、もちろん許されるわけではない。しかし、このような考え方も、満州についてはあるということはおいておく必要がある。記号としての「満州」は、日本人に複雑で重い課題を与えているのである。

そのため、京都大学人文研究所教授で『キメラ－満州国の肖像』（中公新書）という著書のある山室信一氏は、満州について考えることの意味について、こう述べている。

……棄民となって残留した人々も含めて、満州国というのは、国家や軍隊が個人をどういうふうに扱うのか、あるいは個人は国家にどうかかわるのかという問題についての、犠牲の非常に大きかったひとつの実験だったのではないかと思います。シベリア抑留六十余万人、死者六万人以上という事態も含めれば、あまりにも大きすぎた犠牲ですが、二十世紀の国家史の中において満州国がもった意味、そこにおける個人の意味、あるいは国籍を超えた人々との共同や協和といった二十一世紀の最大の課題となるで

植田 康夫

あろう多民族の共存といった問題を含めて、そういう問題を考える糧として満州あるいは満州国を考えていかなければならないと思います。(20)

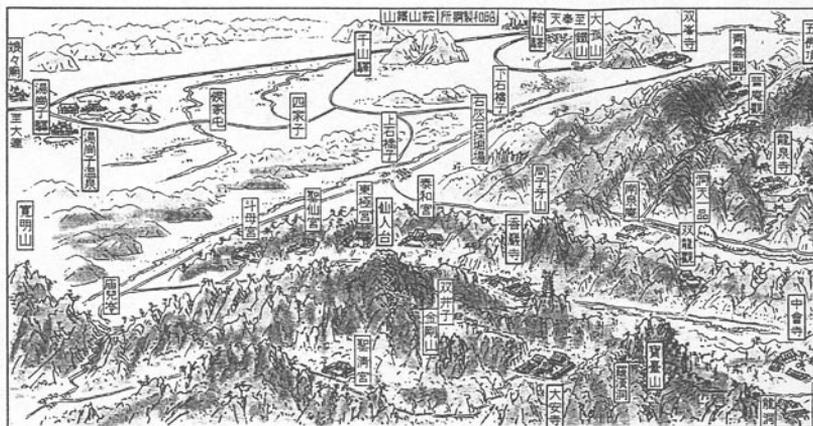
このように、考えるべき課題をわれわれに提示する「満州」は最近、小説としても描かれている。なかにし礼氏の『赤い月』上・下(新潮社)や岩井志麻子氏の『偽偽満州』(集英社)であるが、前者は満州に戦前渡ったなかにし家の体験が描かれ、後者はエンターテインメント小説の舞台として満州がとりあげられている。その題名が『偽偽満州』であるということは、今、記号としての国となった「満州」の形容詞は「偽偽」という言葉がふさわしいのであろう。

〈注〉

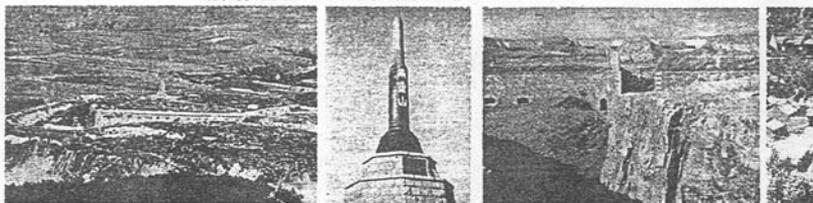
- (1) 『ブリタニカ国際大百科事典(第18巻)』 TBSブリタニカ、1975年、819頁
- (2) 森繁久弥『森繁自伝』中央公論社、1962年、81頁—83頁
- (3) 前掲書、83頁—84頁
- (4) 川村涛『満州鉄道まぼろし旅行』(文庫版)2002年、文藝春秋、4頁
- (5) 前掲書、16頁—17頁
- (6) 前掲書、18頁
- (7) 富永孝子「“実験場”にされた『満州』の天国と地獄」、『環』2002年夏号、藤原書店、297頁—298頁
- (8) 三省堂旅行案内編『朝鮮満州旅行案内』三省堂、1936年、36頁—37頁
- (9) 前掲書、37頁
- (10) 前掲書、37頁
- (11) 満州読書同好会編『満州読書新報(第1巻)』緑蔭書房、1993年
- (12) 「“実験場”にされた「満州」の天国と地獄」、『環』2002年夏号、298頁
- (13) 吉岡数子『「在満少国民」の20世紀—平和と人権の語り部として』解放出版社、2002年、25頁
- (14) 角田房子『墓標なき八万の死者—満豪開拓団の壊滅』中公文庫、1976年、287頁—288頁
- (15) 井筒紀久枝『大陸の花嫁』岩波現代文庫、2004年、188頁、193頁、194頁、197頁、198頁、200頁、205頁、208頁、209頁、212頁、213頁、215頁

- (16) 前掲書、130頁
- (17) 前掲書、同頁
- (18) 黄文雄『台湾朝鮮満州日本の植民地の真実』扶桑社、2003年、294頁
- (19) 前掲書、294頁—295頁  
なお著者には、『満州国の遺産——歪められた日本近代史の精神』（光文社、2001年）という著書もある。
- (20) 山室信一「インタビュー満州・満州国をいかに捉えるべきか」、『環』2002年夏号

図 I



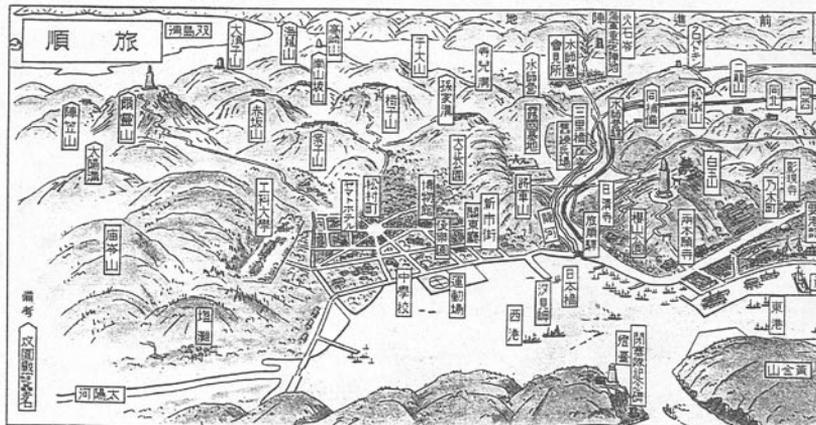
(真寫) 濟開檢部令司審要順旅日七廿月十年一十和昭



最優北山冠鷲東

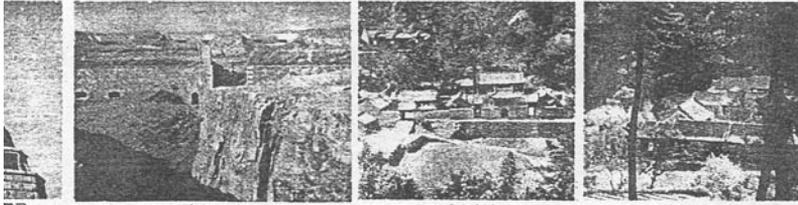
神念祀山麓巖

吉龜山子養





〔日七廿月十年一十和昭〕



圖照

古砲山子峯

寺會中山千

寺安大山千



昭和十一年二月十七日旅順集會司會部所可濟

図Ⅱ

